

## ダニエルの書 - 第百九号

預言の三重の適用を解き明かす：ヨハネの黙示録第九章の預言的意義と現代の改革運動

Jeff Pippenger

2024-03-01

黙示録9章の前半は、第一の災いである第五のラッパを示し、後半は、第二の災いである第六のラッパを示している。これら二つのラッパは、1843年と1850年のパイオニア図表に図解されている。1989年、ソ連の崩壊とともに迎えた終わりの時に、ダニエル書11章の最後の6節の封印が解かれると、十四万四千人の改革運動が始まった。

1989年に認識された真理の中には、聖書史における偉大な改革運動があるということ、そしてそれらが互いに並行しているということが含まれていた。すべての預言者、したがって改革運動を含むあらゆる聖なる歴史は、十四万四千人の最終的大改革運動、すなわち第三天使の力強い運動を例証している。封印の働きが始まるとき、同時に後の雨の注ぎかけも始まる。1989年に改革運動の封印が解かれ、続いて1992年にはダニエル書11章の最後の六節の封印が解かれたが、新たな現在の真理の封印が解かれるときに常に起こるように、それは抵抗の雰囲気を生み出した。

ダニエル書十一章の最後の六節に関する真理が抵抗に遭う中で、主は、二人の証人に基づく原則によって、異教ローマの預言的歴史と教皇ローマの預言的歴史を結び合わせるにより、現代ローマの預言的歴史が識別されるという真理を開示された。預言の三重適用の規則が認識され、その後、誤りに対抗し、真理を識別し確立するために用いられた。各々の改革の線は他の改革の線と並行するということを支える規則と、預言の三重適用に関する規則は、ミラー派の歴史において確立され、用いられ、公にされた規則によって型示されていたとおり、第三天使の運動において確立された規則の礎となった。

原則としての預言の三重適用は、十四万四千人の運動のために封印が解かれた。というのも、彼らは後の雨の運動であり、第三の災いのイスラムは後の雨のメッセージだからである。預言の三重適用の原則は、ユダ族の獅子によって、2001年9月11日に第三の災いのイスラムが歴史に到来するよりもはるか以前に示されていた。彼がその民をエレミヤの古い道に立ち帰らせたとき、第三の災いの到来によって表されるメッセージを終末時代の彼の民が容易に認識できるようにすることを、彼は望んだからである。

黙示録第九章に示されている第五と第六のラッパに関する初期の解釈は、黙示録の中でも歴史によって最も堅固かつ明確に支持されている箇所だと理解されていた。ユライア・スミスは、その点を示すため、歴史家キースの言葉を引用することから、黙示録第九章の解説を始めている。

「このラッパの解説にあたっては、再びKeith氏の著作に拠ることにする。この著者は正しく次のように述べている。『黙示録の他のどの部分についても、第五と第六のラッパ、すなわち第一と第二の災いをサラセン人とトルコ人に適用することほど、解釈者たちの間にこれほど一様な一致が見られるものはほとんどない。それはあまりに明

白で、ほとんど誤解されようがない。それぞれを示すのに一、二節で済ませるのではなく、黙示録第九章全体が、等しい分量で両者の記述に充てられている。』Uriah Smith, Daniel and Revelation, 495.

第一と第二の災いの章区分は、ムハンマドによって代表される第一の災いの歴史を区切っている。その地理的な位置は、歴史家アレクサンダー・キースがサラセン人と呼び、今日ではアラビアと呼ばれる地域にある。オスマン1によって代表される第二の災いの歴史は、地理的にはトルコに位置づけられ、歴史家はそれをトルコ人と同定している。第一の災いの歴史は、イスラム教とムハンマドの誕生地であるアラビアにおいて展開し、成就した。第二の災いの歴史は、オスマン帝国の発祥地であるトルコにおいて展開し、成就した。

第一の災いの歴史は、互いを結びつけていたのはイスラム教という宗教だけであった独立の戦士たちによってローマに向けられた戦争を示している。第二の災いの歴史は、カリフ制と呼ばれる宗教と国家権力が組織化された体制によってローマに向けられた戦争を示している。いずれの場合も、ムハンマドが代表する歴史におけるローマへの独立した戦争であれ、オスマン、すなわちオスマン帝国が代表する組織的な戦争であれ、その戦法は突然かつ不意に攻撃するというものだった。それは、当時の軍事的慣習であったように、兵士全員に同じ色の軍服を着せ、隊列を組ませて銃火の中へ前進させるといった形で行われた戦争ではなかった。「アサシン」という語は、イスラムの戦法、すなわち突然かつ不意に打撃を加えるやり方に由来し、多くの場合、攻撃者自身もまた死に至った。

「assassin」という語はアラビア語の「hashshashin」に由来し、これは「hashish」に由来する。「hashish」は「ハシシ」または「大麻」を意味する。この語はもともと、中世の中東にいたニザール派イスマーイール派のムスリムから成る、秘密主義的で狂信的な集団を指すために用いられた。この集団の構成員は、目的達成のために政治的暗殺の実行を含む、型破りでしばしば暴力的な手段で知られていた。彼らは任務に備えて時にハシシを摂取したといわれ、それが西洋で「hashshashin」または「assassins」という呼称が用いられることにつながった。この集団は中世期に主としてペルシアとシリアで活動し、その時代のさまざまな政治的抗争や暗殺において重要な役割を果たした。「assassin」という語はやがてヨーロッパの諸言語に取り入れられ、政治的または特定の標的に対する殺害を実行する人物を広く指す語となった。

この戦い方は、三つの災いに関する重要な予言的特徴である。というのも、イスラムの予言的役割は戦争を引き起こすことだからだ。象徴としてのイスラムはすべて戦争に関わるものであり、『ヨハネの黙示録』9章では、第一の災いと第二の災いにおけるイスラムが、その戦いのあり方の例証となっている。彼らの戦いは、『ヨハネの黙示録』において、猶予期間が閉じる直前に諸国民を怒らせる行為として特定されている。

諸国の民は怒り、あなたの御怒りが来ました。死者が裁かれる時が来て、あなたのしもべである預言者たちと聖徒たち、また小さな者から大きな者まで、あなたの御名を恐れる者たちに報いをお与えになり、地を滅ぼす者たちを滅ぼされる時が来ました。  
ヨハネの黙示録 11:18

「諸国民」は、神の怒りが臨む直前に「怒らせられる」。そして、黙示録において表されている神の怒りとは、恩恵期間が閉じるときに下る最後の七つの災いである。この節には三つの道標がある。諸国民が怒らされること、神の怒り、そして死者を裁く時である。ここで言及されている死者の裁きは、千年期の間に行われる悪人の裁きであって、1844年10月22日に始まった死者の調査審判ではない。ホワイト夫人は、この節の三つの道標がそれぞれ別個であり、節に記された順序で起こることを明確にしている。

私は、諸国民の怒り、神の御怒り、そして死者を裁く時が、それぞれ別個のものであり、順を追って起こること、またミカエルはまだ立ち上がっておらず、いまだかつてなかったような艱難の時もまだ始まっていないことを見た。今、諸国民は怒りを募らせている。しかし、私たちの大祭司が聖所での働きを終えられるとき、彼は立ち上がり、復讐の衣をまとわれ、その後、最後の七つの災いが注ぎ出される。

「私は、四人の天使がイエスの働きが聖所で終わるまで四つの風を押さえており、その後、最後の七つの災いが来るのを見た。」『初期の著作』36。

聖書の最後の書におけるイスラム教の役割は諸国を怒らせることであり、そのための手段は戦争である。聖書の最初の書におけるイスラム教の役割は、イスマエルとして表されるイスラムに敵対するために、世界中のすべての人の手をつなぐことである。

主の御使いは彼女に言った。「見よ、あなたは身ごもっており、男の子を産む。その名をイシュマエルと名づけなさい。主があなたの苦しみを聞かれたからである。彼は荒々しい人となり、その手はすべての人に逆らい、すべての人の手も彼に逆らう。彼はすべての兄弟たちに向かい合って住むであろう。」創世記16:11、12。

「手」という語は象徴として、聖書におけるあらゆる象徴と同様に、用いられる文脈によって複数の意味を持ちうる。とりわけ聖書の預言においては、「手」は戦争の象徴である。「野の人」と訳されているヘブライ語は、アラビアの野ろばを指す語であり、そこにはいくつかの重要な預言的含意がある。その一つは、アラビアの野ろばが馬と同様にウマ科の動物であるという点である。黙示録9章およびハバククの聖なる図表（1843年と1850年の開拓者図表）の双方において、馬は、三つの災いにおけるイスラムが表す戦争の象徴として用いられている。創世記と黙示録におけるイスラムへの最初と最後の言及は、イスラムをウマ科（ロバまたは馬）の象徴と結びつけており、さらに両者とも、イスラムの役割が「すべての人」（諸国民）に戦争をもたらすことにあると強調している。

黙示録9章11節には、イスラムの性質が明らかにされている。というのも、預言においては性質は名によって表されるからである。イスラムを支配する王に与えられた名は、創世記におけるイスラムへの最初の言及を反映しており、そこではイシュマエルの性質、すなわち霊について「彼はそのすべての兄弟の前に住むであろう」と記されている。イスラム全体を支配する王はイシュマエルの霊（彼らの王）であり、その手は「すべての人に逆らう」のである。

そして、彼らの上には王がいて、それは底なしの淵の天使であり、その名はヘブライ語ではアバドン、ギリシャ語ではアポリオンである。黙示録 9:11

ヘブライ語の旧約聖書、またギリシャ語の新約聖書において、イスラム教の信徒の上に君臨する者は、アバドンまたはアポリオンとして特定されており、いずれも「死と滅び」を意味する。旧約であれ新約であれ、死と滅びこそがイスラムの本質である。イスラムの各信徒の内に支配する霊の具体的な特質と、ろばまたは馬という象徴は、イスラムに関する最初と最後の言及の双方に含まれる要素である。これら二つの預言的属性は、アルファとオメガのしるしを帯びている。ホワイト姉妹が、十四万四千人を生かすメッセージを第三天使の強力な軍勢であると特定するとき、彼女は次のように述べている：

天使たちは四方の風を押さえている。それは、つなぎを断ち切って全地を駆け抜け、その行く先々に破壊と死をもたらそうとする怒れる馬として表されている。

「永遠の世界のまさに瀬戸際にいながら、なお私たちは眠っているのでしょうか。鈍く、冷たく、死んだようであってよいのでしょうか。ああ、私たちの諸教会において、神の御霊と息吹がその民のうちに吹き入れられ、彼らが自らの足で立ち、生きるようになることを。私たちは、その道が狭く、門が細いことを見なければなりません。しかし、私たちがその細い門を通るとき、その広がりには限りがありません。」 Manuscript Releases, volume 20, 217.

十四万四千人の封印の間、四つの風は抑えられており、その四つの風は、その進むところに「死と破壊」をもたらす「怒れる馬」である。2001年9月11日、第三の災いが「霊的な栄光の地」を「突然かつ不意に」襲い、「死と破壊」をもたらして預言的歴史に到来し、その結果「諸国民を怒らせた」。2023年10月7日には、第三の災いは「死と破壊」の道を進み続け、「実際の栄光の地」を「突然かつ不意に」攻撃して、さらに「諸国民を怒らせた」。最初の不意の攻撃は、十四万四千人の封印の期間の始まりを画し、2023年10月7日の最近の攻撃は、十四万四千人の封印の終結期、すなわち「締めくくり」の始まりを画している。私たちは、永遠の世界のまさに瀬戸際に眠っていてよいのだろうか。

二つの神聖なパイオニア図表のいずれにも、第一と第二の災いにおけるイスラムが、軍馬に騎乗するイスラム戦士によって視覚的に描かれている。両方の図では、第一の災いの軍馬に乗る騎手は槍を携え、第二の災いを表す馬の騎手はライフル銃を発砲している。この違いは『ヨハネの黙示録』第9章に明確に示されている。なぜなら、火薬が発明されて初めて戦争で使用されたのは、第二の災いの時代だったからである。『ヨハネの黙示録』第9章17節から19節について論じながら、ユライア・スミスは次のように記している：

この記述の前半は、これらの騎兵の外見に言及しているのかもしれない。色を表す場合、火は赤を意味し、「火のように赤い」という言い回しもしばしば用いられる。ジャシント、すなわちヒヤシンスは青を、硫黄は黄色を表す。そして、これらの色がこれらの戦士の装束の大部分を占めていた。したがって、この見方によれば、この記述は、主として赤（あるいは緋色）、青、黄色から成るトルコ軍の軍服に正確に符合するだろう。馬の頭は、その強さ、勇気、獰猛さを示すために、見たところライオンの頭のものであった。一方、節の最後の部分は、戦争目的での火薬と火器の使用を指していることは疑いないが、それらは当時導入されたばかりであった。トルコ軍が馬上で火器を発射したため、遠くから見ると、添えられた図版に示されているように、火と煙と硫黄が馬の口から噴き出しているように見えたであろう。

コンスタンティノーブルに対する遠征におけるトルコ人の火器の使用について、エリオット (Horae Apocalypticæ, Vol. I, pp. 482-484) は次のように述べている——『「火と煙と硫黄」——すなわちマホメットの砲と火器——こそが、人々の三分の一の殺害、すなわちコンスタンティノーブルの占領、そしてその帰結としてのギリシア帝国の滅亡の原因であった。コンスタンティヌスによるこの都市の創建から、すでに千百年以上が経過していた。その間に、ゴート人、フン人、アヴァール人、ペルシア人、ブルガリア人、サラセン人、ロシア人、さらにはオスマン・トルコ人自身までもが、敵対的な攻撃を加え、あるいは包囲した。しかし、その防備は彼らには攻略不能であった。コンスタンティノーブルは生き延び、それとともにギリシア帝国も存続した。ゆえに、スルタン・マホメットはこの障害を取り除くものを見いだそうと焦慮した。「コンスタンティノーブルの城壁を打ち倒すのに十分な大きさの大砲を鑄造できるか」と、彼のもとに寝返った大砲の鑄造師に問いかけた。それからアドリアノーブルに鑄造所が設けられ、大砲が鑄造され、砲兵が整えられ、そして包囲が始まった。』

ギボンが、常に黙示録の予言に対する無意識の注釈者として、ギリシア帝国の最終的破局を雄弁で印象的に叙述する中で、この新たな戦争の手段を彼の描写の前景に据えていることは、十分に注目に値する。その前置きとして、彼は火薬という近時の発明——「すなわち硝石・硫黄・木炭の混合物」——の歴史を述べ、スルタン・アムラトによるその先行使用について語り、また、前にも述べたとおり、アドリアノーブルにおけるマホメットの大型大砲の鑄造所についても語る。ついでに、包囲戦そのものの進展の中で、次のように描写する。「槍と矢の一斉射には、火縄銃や大砲の煙、音、そして火炎が伴った。」「トルコ砲兵の長い列が城壁に向けられ、十四の砲列が一度に最も攻めやすい場所を轟かせた。」「長年にわたり敵の暴威に耐えてきた要塞は、オスマンの大砲によって四方から破壊され、多くの破口が開かれ、聖ロマヌス門の近くでは四つの塔が地面と同じ高さにまでならされた。」「陣地、ガレー船、橋から、オスマンの砲が四方で轟くあいだ、野営と都市、ギリシア人とトルコ人の双方が煙の雲に包まれ、それはローマ帝国の最終的な解放か破壊によってのみ晴らされうるものだった。」「二重の城壁は大砲によって瓦礫の山に帰した。」「そしてついに、トルコ軍が破口をよじ登り、コンスタンティノーブルは征服され、その帝国は覆され、その宗教はイスラムの征服者によって塵に踏みにじられた。」私は、ギボンがこの都市の陥落、ひいては帝国の滅亡を、どれほど顕著かつ印象的にオスマンの砲兵に帰しているかは、よく注意に値すると言う。というのも、それは我々の予言の言葉への注釈以外の何であろうか。「これら三つによって、人々の三分の一が殺された。すなわち、彼らの口から出る火と、煙と、硫黄とによって。」

18節. 彼らの口から出る火と煙と硫黄、この三つによって、人々の三分の一が殺された。19節. 彼らの力は口と尾にある。彼らの尾は蛇のようで、尾には頭があり、その尾で害を加える。

「これらの節は、新たに導入された戦争様式の致命的な効果を表している。すなわち、これらの兵器——火薬、火器、大砲——によって、コンスタンティノーブルはついに征服され、トルコ人の手に渡されたのである。」ユライア・スミス『ダニエル書と黙示録』510-514.

第三の災いの考察は、次回の記事で続けます。

昨夜、私は心に大きな重荷を負って眠りから目を覚ました。私は私たちの兄弟姉妹にメッセージを伝えており、それは、聖霊を受けること、そしてそれが人間の媒介を通して働くことに関して誤った理論を唱えている者たちの働きについての、警告と教へのメッセージであった。

私は、1844年に時が過ぎた後、私たちが対処するよう求められたものと同様の狂信が、メッセージの終わりの日々に再び私たちの間に入り込んでくること、そして私たちが初期の経験においてそれに立ち向かったのと同じように断固として、今この悪に立ち向かわなければならないことを教えられた。

私たちは偉大にして厳粛な出来事の瀬戸際に立っている。預言は成就しつつある。奇しくも多事に富む歴史が天の書に記されつつある—それは、神の大いなる日に先立って間もなく起こるはずだと宣言されていた出来事である。世界のすべては不安定な状態にある。諸国民は怒り、戦争のための大規模な準備が進められている。国は国に、王国は王国に対して策をめぐらしている。神の大いなる日は、いよいよ切迫している。しかし、諸国民が戦いと流血のために兵力を結集しているにもかかわらず、神のしもべたちの額に印が押されるまで四方の風を押さえておくようにという天使たちへの命令は、いまなお有効である。Selected Messages 第1巻、221ページ。